彼幽探偵（カユタン）

紫電改

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
彼幽（カユタン）探偵

【Ｎコード】
Ｎ２６８１Ｚ

【作者名】
紫電改

【あらすじ】
事件を追っていると僕はある事件に巻き込まれていくことになる。相手の狙いは犯罪者の撲滅。見えない敵が前にいる。

激痛（前書き）

僕が書いている小説（ＭＡＩＮ　ＴＲＡＦＦＩＣ）の登場人物を使ってもう１本書いてみることにしました。

なお、これはこういうものですので、考えがかぶっている可能性があります。かぶっていたら先に作っていても作っていなくてもすみません。

激痛

ある日のこと。僕は捜査の依頼を受けて、その事件を追っていた。
（まただ。）
と思った。目的の人が僕の眼科から消えている。すぐに追ってその人のシルエットをとらえる。これでよし。見失わないようにその人の行動に注意した。
次の瞬間。ターゲットの隣を歩いていた人が突然倒れこみ、ターゲットが眼科から消える。
（まさか。）
駆け寄ってみるとこれまでと同じことが起きていた。
その人はナイフで心臓を一突きされていたのだ。
（どうしてだ。なんであいつの隣を歩いている人だけに限ってこういうことになる・・・。）
と考えたが、すぐに警察を呼ばなければと考え、警察に電話した。
しばらく張り込む人のことを忘れて、その場に残る。もうすぐ警察が来るはずだ。
「うっ。」
思わず声を上げた。
何かが左腕に刺さった感覚を覚えたからだ。
（なんだ。）
左腕が通っている服をまくって何か刺さっているものがないか調べてみたが、何も刺さっていない。そして、その痕跡もない。
（気のせいか。）
次の瞬間。体全体に激痛が走る。
「うっ。」
反射的に左腕のひじのあたりを抑えた。なぜここが痛むのか。
（気のせいなんかじゃない。本当に何かが・・・。）
「うわっ。・・・。」

息が荒くなってくる。息を整えようとすると次の激痛がやってくる。
そのまま地面にうずくまり、その痛みが引くのを待つ。だが、そのままの姿勢でいられない。地面を体の運動だけで這いずり回った。
そして、その痛みは２０秒くらい続いて終わった。
この後気を失う。だが、すぐにその状態から元に戻る。
（どうなったんだ。）
目を開くと正面が赤にしか見えない。そのうち赤い視界は引いていく。
「あの。すみません。」
声をかけられる。その方向から警察官がひとり小走りにやってきた。
「通報してくれた方ですか。」
相手はそう聞いてきた。
だが、僕が見ていたのはこの人であり、この人ではなかった。僕はこいつの上に刻印を見たのだ。

激痛（後書き）

感想がございましたらお書きください。
なお、僕には文才がないので数話で終わってしまうと思います。
そんなものでも読んでくれる人には感謝。

類似事件（前書き）

彼は幽霊探偵。
カユタンの意味です。

類似事件

それから1か月が過ぎた。
「梓(あずさ)。この事件解けた。」
同僚の薗田(そのだ)が話しかけてくる。
「解けるわけないでしょ。こんなの。被害者に接点がない事件なんて聞いたことがないよ。」
「でも、起こりはじめてからもうすぐ2か月たつよね。」
「・・・。経つね。その間に被害を受けた人は20人超えてる。それも同じやるかたもあるけど、ほとんどが違うからね。」
「誰がこんなことしてるんですかねぇ。」
「知るか。犯人すら浮かび上がってないんだよ。こっちも全力でやらなきゃ。」
薗田(そのだ)を促して、捜査一課に戻る。戻るなり上司の鳥峨(とりがや)家から現場へ急行してくれと命令があった。
現場に着く。二人前に殺された人が倒れていた場所もこんなビルの間だった。
「黒崎(くろさき)刑事。」
警官が一人寄ってくる。
「また犯罪者なわけ。」
これまでの兆候をその人に話す。
「はい。そうです。殺されたのは橋場慶介(はしばけいすけ)17歳。15歳の時に万引きなど犯したことにより・・・。」
「その先は説明しなくていいよ。」
黒崎(くろさき)は言おうとしているのを制して、その人に向き合う。
「・・・。」
「これじゃあ日本中の人全員が殺されるんじゃない。」
薗田(そのだ)が隣でつぶやいた。
「そうさせちゃだめだな。どうにかしないと。」

それをビルの上から見ている人がいた。

類似事件（後書き）

人物についてはもう一作の登場人物のフルネームと各種設定が記載されている回がございます。そちらを参照してください。

なおそこに記載されていることは変わっていません。

裏の手引き

今テレビを見てもニュースはこのことでもちきりになっている。これまで２０回以上事件は起きているわけだが、それの目撃証言が全くないというのだ。殺している人はいるのだが、その頃仕方が妙なのである。被害者からしてみれば知らぬ間に死んでいるのだ。これも面白がって報道するのがマスコミの仕事。まぁ、その時点で頭がおかしいが。

携帯が鳴る。すぐに出てみると、

「ナガシィ。どうしたの。」

「ああ。萌。一つお前に止めてほしいことがあるんだ。」

「何。」

聞き返すと永島から重い口調で今テレビでやっていることについて語り始めた。

「それ。ウソでしょ。」

自分の耳が信じられないので聞き返す。永島からは返答がない。本当に・・・。

「ああ。前お前警視庁に知り合いがいるって言ってただろ。その人に俺自身を捕まえさせる。それでいいはずだ。」

「でも、ナガシィ死ぬんでしょ。」

「大丈夫。一つだけ以外は問題ない。」

「問題ある。」

「・・・。頼む。俺にはもうそれしかない。」

「・・・。」

了承しかねた。だが、自分を止めるためにはこれしかない。確かに。それしかないのかもしれない。

「わ・・・分かったよ。」

今の自分にはこう答えるしかなかった。

その後黒崎にこのことを話し、今日永島が現れるというところに

網が引かれた。

裏の手引き（後書き）

ここ数話は決まりきった考えがあったのでそのまま採用しました。
ここからちゃんとストーリー考えないと・・・。

もう一作より短いからそんなじゃないかなぁ・・・。

押さえる

「おい。坂口。ここにその犯人が現れるって本当か。」
黒崎が半信半疑で聞いてくる。
「こんな廃墟ビルに人がくるとは思えないけど。」
「彼がそう言ったの。だから信じて。」
「その彼の気持ちが変わってたらどうするの。ここに来たのはあたしの車だけど、車が止まってたら警戒してこないんじゃない。」
「そこだけは信じるしかない・・・。」
時間がたつにつれて自分でもその自信がなくなってくる。
「もう来ないんじゃないか。」
黒崎は時計を見た。もう次の日になっているうえに2時を回っている。
突然白い物体が上からドスンという音を立てて自分たちの前に現れた。
その光景に思わず目を閉じたのは黒崎だ。刑事のわりにこういうところに弱い。すぐに私はビルの上を見た。
「梓。あそこ。」
指差して、黒崎の目線を目の前から上にずらす。
「ウソ。いつの間に。」
ずっと張っていて人が通ったということはない。それなのにビルの屋上には人が立っているのがはっきりと見えた。
「中行こう。」
「ちょっと待て。逃げちゃわないか。」
「大丈夫。彼は逃げない。死体遺棄の現行犯で逮捕すればいい。」
「・・・。」
坂口に促される形でビルの屋上まで行く。確かにそこにはさっき見たであろう人が一人立っている。
「おい。」

黒崎(くろさき)は大声を張り上げる。どうせこの時間だ。聞いている人はここにいる人以外恐らくいない。そして、焼け落ちた廃ビルだ。
「すべては僕の計算通りです。」
彼はそういうと倒れこんだ。黒崎(くろさき)が駆け寄ったが、その時には遅かった。口の中からアーモンドのにおいがする。青酸だ。
黒崎(くろさき)は坂口(さかぐち)に首を小さく横に振った。坂口(さかぐち)はそのあとすぐに崩れた。
「萌(もえ)。悪い。これはしょうがないんだ。」
死んだ人の声が自分の耳に入った。

押さえる（後書き）

考えていくとこれって戦いになるのか。

説明

それからというもの萌(もえ)はナガシィと話そうとしただが、こちらから話しかけても話してくれなかった。ナガシィが口を開いたのは探偵事務所についてからだった。

「まず。ここ2か月ぐらいのことを話そう。」

彼は重々しい口調でそう言って、語り始めた。

「俺が最後に依頼を受けたのは2か月前の依頼だ。その人の依頼は自分の身辺で起きていることを探ってほしいとのことだった。」

その人に対しナガシィはできる限りのことをやっていたらしい。そして、一つだけ気になることが彼の周りで起こった。彼が歩いているとその隣の人が倒れこむということだ。そして、その直後彼は姿を消してしまいということだった。これを調査している家庭でナガシィはそれに自分がなってしまったという。

「これをおってて分かったことだけど、この事件には目撃証言がないっていうのが共通事項。俺だって被害者が倒れるところしか見てないことが多い。」

「そんなのどうやって捜査すればいいんだよ。」

当然の答えが返ってくる。

「確かに。だが、一つだけ見分けることができる。」

そう言ってさらに続けた。

「こいつらは犯罪者を見ると左目のみ赤くなる。俺が経験した限り写真でも反応する。もちろんそいつが生きていればの話だがな。」

「でも、そんなことしたら、ナガシィまた。」

「その可能性はもうない。俺も今こう言う能力を乗っているけど、薄れているのを感じてる。恐らくこの世にいる他の誰かに乗り移りつつあるんだ。」

「・・・。」

「もちろん。その人がここにいるのかということ自体わからない。

見つけるしかないんだ。」
「・・・。それってあたしの近い人でもあるってことでしょ。」
「そういうことだ。だけど、このことはそんな甘ったれたこと言ってる場合じゃない。俺だってなったんだ。お前だって例外じゃなくなる可能性は否定できない。今の俺からしてみればお前だけが頼りだ。」
彼は強くそう言った。

説明（後書き）

・・・。説明文。僕の真骨頂ですが、こうなると書きづらい。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2681z/

彼幽探偵（カユタン）

2011年12月13日05時46分発行